

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、4月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（4月）

令和 6 年 3 月 29 日  
愛 媛 県

- 1 気象予報（高松地方气象台）  
1 か月予報 3 月 21 日発表（3 月 23 日～4 月 22 日）

< 予報のポイント >

- ・向こう 1 か月の気温は、温かい空気に覆われやすいため高いでしょう。特に、期間のはじめはかなり高くなる見込みです。
- ・低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう 1 か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込みです。

< 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 10 並 20 高 70% 高い見込み	少 20 並 30 多 50% 多い見込み	少 50 並 30 多 20% 少ない見込み

- 2 病害虫の発生予想

麦 類

(1) 赤かび病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 3 月第 4～5 半旬の子のう胞子の飛散調査では西条市丹原町、松山市上難波ともに飛散量は平年より少ない（表 1）。
- (イ) 3 月第 3～4 半旬に出穂した圃場（ハルヒメボシ）では、開花期に降雨の影響を受けているとみられる。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

表 1 麦赤かび病の子のう胞子飛散調査結果

調査地点	3 月第 4 半旬		3 月第 5 半旬	
	本年	平年	本年	平年
西条市丹原	3	7.5	3	9
松山市上難波	5	28	7	21.8

※平年：過去 10 年間の平均

ウ 防除上の注意

- (ア) 裸麦（品種：ハルヒメボシ）で出穂期は、11 月前半に播種した圃場では出穂期は昨年より早く、12 月に播種した圃場では遅くなる見込みである（11/1 播種で 3/15、12/1 播種で 3/29、12/15 播種で 4/5 と予想されている（農林水産研究所））。本病が最も感染しやすい時期は、出穂から 4～5 日経過後の開花始期からほぼ 10 日間であり、この時期に温暖で降雨があると子のう胞子の飛散量が増加し、感染に好適となる。
- (イ) 子のう胞子の飛散は、湿度 80%以上、気温 15℃以上が 1 時間以上続く場合に増加する。
- (ウ) 防除適期は開花期（出穂 7～10 日後頃）であり、開花期に必ず防除を行う。
- (エ) 開花期以降も、温暖で雨（湿潤）が続くようであれば、二次感染が助長されるため、開花期の防除からさらに 7～10 日後に追加防除を実施する。
- (オ) トップジン M 剤の適用登録の使用回数は、大麦では出穂期以降 1 回以内、小麦では出穂期以降 2 回以内となっているため、散布に際して注意する。
- ※ 令和 6 年の子のう胞子飛散状況は病害虫防除所ホームページの「調査データ」に掲載していません（3 月 16 日より計測開始）。

## かんきつ

### (1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 2月に行った越冬病斑量調査の結果、伊予柑では発生園地率は平年並、発病度は少、甘平では発生園地率、発病度ともに平年並の発生であった。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 夏秋梢などの罹病枝葉を除去し、園地の病原菌密度を下げる。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットによる防風対策を行う。

(ウ) 多発園地では、新葉への感染防止対策として、開花前（4月中～下旬）に薬剤防除を行う。

### (2) そうか病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 常発地における3月の越冬病斑量調査の結果では、過去8か年の結果と比較すると発病葉率は平年並、発病度は高い（表2）。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 罹病枝葉を除去し、園地の病原菌密度を下げる。

(イ) 展葉初期（新梢長約1cm）の防除の効果が高いため、圃場観察を行い、適期を逃さないようにする。

表2 カンキツそうか病の越冬病斑調査結果（3月調査）

調査園地数	発病葉率(%)		発病度	
	本年	平年	本年	平年
6	1.08	0.75	0.65	0.21

※平年：過去8年間の平均

### (3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 3月中旬の調査では、寄生葉率、1葉当たりの雌成虫数ともにやや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 冬季にマシン油乳剤を散布していない園地では、密度が急激に高まることがあるので、圃場観察を行い、密度が高まる前に防除を行う。

## かき

### (1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 3月の越冬病斑量調査の結果では、発生園地率は平年並、発生枝率はやや多である（表3）。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 剪定時には越冬病斑のある枝を徹底して除去し、園地内の病原菌密度を下げる。また、切除した枝は園地内に放置せず、適切に処分する。

表3 カキ炭疽病の越冬病斑調査結果（3月調査）

調査園地数	発生園地率(%)		発生枝率(%)	
	本年	平年	本年	平年
57	17.5	16.0	1.11	0.65

※平年：過去10年間の平均

## キウイフルーツ

### (1) かいよう病

ア 予報の内容 発生注意

イ 予報の根拠

(ア) 3月上中旬の調査（品種：ヘイワード、19園地）では、5園地で枝幹部からの赤褐色の樹液漏

出を確認しており、一樹当たりの漏出個所数（R6.3月：0.14か所/樹、平年：0.03か所/樹）は過去7年間で最も多い。

- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。また、キウイフルーツの生育が早まり、病徴発現が早まる可能性がある。

ウ 防除上の注意

- (ア) 園地の見廻りを徹底し、赤褐色の樹液漏出、芽枯れ、葉の斑点等の発生の有無を確認する。  
(イ) 発生確認後は、周辺樹への拡散防止のため、発病部の早期除去を徹底する。  
伐採基準は、「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。  
(ウ) 強風雨による枝葉の付傷は感染を拡大させるため、園地の防風対策を強化するとともに、発生園地やその周辺園地では、強風雨前後には抗生物質剤により応急防除を行う。  
(エ) 新梢への感染防止のため、発芽後叢生期（新梢長約10cm）までに防除を行う。なお、銅水和剤については、開花直前～開花1週間後は受粉等に影響があるので散布は避ける。

果樹共通

- (1) カメムシ類（うめ、もも、キウイフルーツ、なし、すもも、かんきつ、かき等）  
**（令和6年3月22日付け 病害虫発生予察注意報（第1号）参照）**

野 菜

- (1) ベと病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 3月中旬の調査では、促成栽培では平年並、半促成栽培では多の発生である。  
(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。  
(イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。  
(ウ) 老化葉はできるだけ除去し、圃場内の通風を図る。伝染源を減少させるため多発葉を除去する。  
(エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬剤が葉裏の菌叢までかかるよう丁寧に散布する。また、病勢が進展している場合は、治療効果の高い薬剤を散布する。

- (2) コナジラミ類（冬春トマト、冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：冬春トマト 並  
発生量：冬春いちご やや多～多

イ 予報の根拠

- (ア) 3月中旬の調査では、冬春トマトでは発生を確認していない。冬春いちごではタバココナジラミはやや多、オンシツコナジラミは平年並の発生である。  
(イ) 気象予報では、気温は高い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 葉液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。  
(イ) 本虫は、多くの植物に寄生するため圃場内外の除草を徹底する。  
(ウ) トマトではタバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を、両種はトマト退緑ウイルス（ToCV）を媒介するので注意する。また、ウイルス病発病株は早期に抜き取り速やかに処理する。

- (3) ハダニ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 3月中旬の調査では、やや少の発生である。  
(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 気温上昇に伴い増殖が早まるので注意する。  
(イ) 圃場を観察して早期発見に努め、発生がみられたら早めに防除する。また、同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含めローテーション使用を心掛ける。  
(ウ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。また、摘葉を行い、葉液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

- (4) アザミウマ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 3月中旬の調査では、平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 気温の上昇に伴い、ハウス外からの侵入が増加してくる時期となるので、圃場内の発生に注意する。
- (イ) 花や幼果に寄生するため、圃場観察に努め、早期発見による早めの防除を心掛ける。
- (ウ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。
- (5) 灰色かび病（冬春トマト、冬春いちご、冬春きゅうり）
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 3月中旬の調査では、平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 換気を図り、ハウス内の多湿を防止する。
- (イ) 過繁茂や軟弱な生育は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 発病果や枯死茎葉は早めに除去する。
- (6) うどんこ病（冬春いちご）
- ア 予報の内容 発生量：やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 3月中旬の調査では、葉の発生はやや多、果実の発生は平年並である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 伝染源となる発病葉・発病果や古葉はできる限り除去し、通風と薬剤の付着性を高める。
- (イ) 果実発病が中心となるため、発病初期の防除に重点を置く。
- (ウ) 薬剤散布に当たっては、展着剤を必ず加用し、葉裏や芽の間隙部に薬剤が付着するように丁寧に散布する。
- (7) ベと病（たまねぎ）  
**（令和6年3月29日付け 病害虫発生予察注意報（第2号）参照）**
- (8) ネギアザミウマ（たまねぎ）
- ア 予報の内容 発生量：やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 3月上中旬の調査では、1株当たりの成・幼虫数は0.73頭と調査を行った過去7年間で2番目に多い発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 薬剤散布に当たっては、薬液が葉の基部までかかるように丁寧に散布する。
- (イ) たまねぎの葉身は薬液の付着性が悪いため、展着剤を必ず加用する。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (エ) 本虫はアイリスイエロースポットウイルス（IYSV）を媒介するので、発生に注意する。

**【病害虫発生予察情報】**

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは <https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>

**【農薬使用時の注意】**

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種の防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。